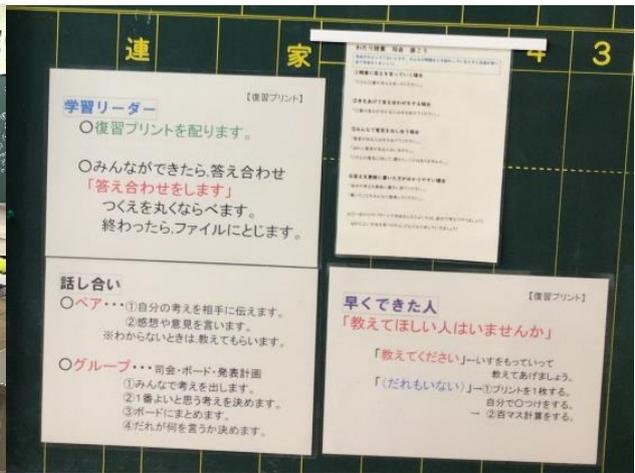


# 複式学級指導の手引き



令和4年12月

亀山市教育委員会

はじめに	.....	1
1. 複式学級とは	.....	2
2. 複式学級編製の基準	.....	2
3. 複式学級における教育課程編成の根拠	.....	2
4. 複式学級の特性を生かす	.....	2
5. 複式学級指導の基本的な方針(取り組む視点)	.....	4
6. 複式学級を生かした教育課程編成における留意点	.....	5
(1) 教育課程の編成	5	
(2) 小規模校における教育課程編成上の留意点	6	
(3) 複式学級における教育課程編成上の留意点	6	
7. 複式学級の授業方法	.....	8
(1) 学年別指導(複式指導)	8	
(2) 同単元指導	13	
(3) 合同授業	13	
(4) 集合学習	15	
(5) 交流学習	16	
8. 複式学級の学習指導過程	.....	16
9. 複式学級における学習指導方法の工夫・改善	.....	26
(1) 教師の心構え	26	
(2) ノートのとり方の指導の工夫	27	
(3) 黒板やホワイトボードの使い方の工夫	28	
(4) 多様な考えを引き出す工夫	29	
(5) 効果的に学年別に学習する座席配置	30	
10. 複式学級を有する学校の学校経営・学級経営	.....	31
(1) 初めて複式学級を有する小学校に勤務する教職員の皆さんへ	31	
(2) 管理職のリーダーシップのもと学校全体で取り組む	32	
(3) 単式学級から複式学級への移行期の指導や学校経営で大切にしたいこと	33	
(4) 保護者や地域の方々へ複式学級指導について情報を発信する	35	
(5) 複式教育に係る校内研修・校内研究	36	
(6) 複式学級を有する学校間の協力	36	

はじめに

亀山市教育委員会では、市内の小学校の児童数の現状を踏まえ、また、今後の複式学級指導の充実を図るため、「複式学級指導の手引き」を作成しました。

平成 29 年3月に小学校学習指導要領が告示され、「何ができるようになるか」を念頭に、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理されました。子どもたちがこれらの資質・能力を身に付けるために、複式学級においても各教科等の教育課程及び指導の在り方を新しい学習指導要領にあわせて検討・研究し、確実な実践・推進が求められます。そこで、複式学級指導の在り方を手引きにまとめ、複式学級の特性や複式学級指導の留意点等を周知し、実践を行っていく教職員が大いに参考にすることで、その地域・学校にあった教育推進のために役立ててほしいと願っています。

少子高齢化、情報化、国際化等子どもたちを取り巻く環境は近年大きく変化しています。これからの変化の激しい社会を力強く生き抜いていくための力を子どもたちが身に付けられるよう、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められています。

複式学級の指導方法として「直接指導」「間接指導」があり、それに伴う「ガイド学習」があります。教師が一方の学年の子どもたちを指導している間、もう一方の学年の子どもたちはガイド役の子どもを中心に協働して自分たちで学習を進め、考えを広げ深めるものです。この「ガイド学習」によって課題に主体的に取り組む子どもたちの姿は、新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」に通じるものであり、複式学級に限らずすべての学級での学習指導のヒントとなるものであります。

本手引きを活用し、異学年で学ぶことのよさに目を向け、一人ひとりの子どものよさや可能性を把握し、個に応じた指導が行われますとともに、複式学級指導の充実に努めていただきたいと思います。

令和 4 年 12 月

亀山市教育委員会

## 1. 複式学級指導とは

○複式学級（複数学年を1学級で編制した学級）において、その特色に応じた学習方法で行われる指導を複式学級指導といいます。

## 2. 複式学級編製の基準

○複式学級の児童生徒数は、小学校では1学級16人（1年生を含む場合は8人）中学校では8人が上限です。（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第3条）例えば2つの学年の児童数を足して、16人を超える場合は、複式にはなりません。（現在のところ、三重県教育委員会独自の基準として、小学校6年生を含む場合は14人という基準もありますが、予算の状況もあり年度ごとに基準は更新されます）

## 3. 複式学級における教育課程編成の根拠

○学校において2以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合には、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。（小学校学習指導要領総則 第2 5、中学校学習指導要領総則 第2 4 参照）

## 4. 複式学級の特性を生かす

○複式学級では、授業において学年別に授業することがあります。2つの授業を1人の教員が担当するわけですから、必然的に、単式学級以上に児童だけで学習を進めなければならない状況が生まれます。これは短所のようなのですが、児童の主体的な学びの場面として生かせば長所となります。

○複式学級指導にあたって、教師は、児童が自分たちで学習が展開できるよう、事前に本時の目標を明確にし、直接指導しなくとも児童が学習できるような展開を考え、それを児童によく理解させたり、慣れさせたりするとともに、学習をリードするガイドを育成していく等の方法上の工夫をしていく必要があります。このことにより、教師が一方向的に教えるのではなく、児童自らが進行し、考えを発表し、話し合う、児童が主体的に学ぶ授業となります。

○また、間接指導の時間を通してどのようなことを児童が考えたのか捉えられるように、ノートに振り返りを書いてまとめる活動を行うことで、その振り返りをもとに次時を展開することが

できます。

○このような複式学級の指導は、教育基本法や学校教育法、学習指導要領等が求めている主体的に学習に取り組む態度を養い、学力向上につながる可能性に満ちた指導であるといえます。

○複式学級のよさを生かすためにも、教師は、単式学級と同じ指導法を複式学級に持ち込むのではなく、「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえ、指導観を見直し、児童の実態に適した複式学級にふさわしい指導を実践する必要があります。

○一般的に、下記のような特性があると考えられます。複式指導を進めていくうえで、これら特性を知ることは、とても大切なことと考えます。

- ・2つの学年の児童によって編制されている学級である。
- ・学年の枠を超えた社会を形成している学級である。
- ・学年の組み合わせにより、学級の構成人数が毎年変わる学級である。
- ・少人数学級である。
- ・学年等の割合がアンバランスになりがちな学級である。

○複式学級のよさとしては、

- ・異年齢同士の協力的な態度を養いやすい。
- ・一人ひとりの存在感や役割を持たせやすく、リーダー性を育てやすい。
- ・自分たちで学習を進めていく場面が多く、自主的、協力的な学習態度を育てやすい。
- ・一人ひとりの児童によく目が行き届き、丁寧に指導することができる。
- ・児童同士や、児童と教師の関わりが濃く、温かい雰囲気が醸成されやすい。

○複式学級指導上の課題

- ・当該学年の発達段階にそぐわない内容を学習する場合がある。
- ・直接指導を行う時間が短くなる場合が多い。
- ・下学年児童の依頼心が強くなる傾向があり、学級になじむまでは配慮を必要とする場合がある。
- ・等質的な行動や同調的な発言が多くなりがちで、多面的、発展的な考え方を育てる配慮を必要とする場合がある。
- ・実験や作業等、一人あたりの負担が大きくなりやすい。

○この他にも、複式学級を有する小学校の教職員集団も小規模となるため、学校において

は、校長、教頭のリーダーシップが発揮しやすい、教員が個性を発揮しやすい、共通理解が図りやすい、といった長所があります。

○一方、会議や研修等の出張に出かけにくい、一人で多くの校務分掌を担当するため多忙になる、といった課題もあわせもっています。

○このような複式学級の特徴、複式学級を有する学校の特徴を理解したうえで、複式学級で育つ児童のために、より豊かで充実した教育が積み上げられるよう工夫し、教育課程を編成する必要があります。

## 5. 複式学級指導の基本的な方針（取り組む視点）

○少人数学級の特徴を生かした教育活動の推進

・学校教育施行規則では、「学級が12～18学級を標準」としそれ以下を「小規模校」としていています。これまでも、市内においては、長年にわたり小規模校が地域の学校として、特色ある学校経営が展開され、教育活動が推進されてきました。しかし、近年、児童数は地域によって年々減少してきており、複式を有する学校が増加傾向にあります。1学級10数名の学校も含めて、少人数学級の特徴を生かしてこれまで以上に教育活動の推進を図る必要があります。

○児童の少ないことを優位な条件としてとらえる

・ある学校では、学年や学級の枠組みだけではなく、全校児童による教育活動を計画し、特別活動での主体的・自主的な活動として異年齢集団による特色ある教育活動を展開し、児童一人ひとりが主役となり活動を有意義なものとしています。またある学校では、地域の環境である自然や社会、人等を生かした体験的な活動を積み上げ、自然とのふれあいや地域社会とのふれあいを通して豊かな感性が培われており、どの子ども生き生きと学校生活を過ごしています。こうした実践は児童の少ないことを優位な条件としてとらえ、地域の特性を踏まえ児童一人ひとりのよさや持ち味を生かして教育効果を上げているものですし、まさしく小規模校のよさがここにあるといえます。

○学校運営協議会での熟議……小規模校においては、特に地域や保護者との活発なかわりが不可欠です。人数が少ない分、活動が取り組みやすいという利便性・機動性がある反面、準備や支援など、行事の内容によってはマンパワーが不足になる場合があります。学校運営協議会等で、学校行事や子どもたちに求められる力の育成等に必要な活動を話し合う中で、積極的に地域に働きかけ、地域の人材を活用することができないかなど、協議すること

が効果的だと考えます。定期的な協議会での児童の様子共有や必要に応じて学校行事や地域行事との融合や共催など取組方針についても、話し合うことが重要です。

○発想の転換……「複式学級だからできること」「複式学級だからこそ」という視点で、指導方法や指導体制を工夫・改善に取り組んでいくことが重要です。

○学校全体で……複式学級指導はその担任のみが考えることではありません。学校全職員で、校内研修のテーマの一つとして、指導方法や指導体制について、研究し、指導内容の蓄積も含め、取り組んでいくことが大切です。

○教科指導の確かな力……複式学級指導でも、教科のねらい(つけたい力)を意識し、その力を確実に身につけさせることをめざして、授業を組み立てることは言うまでもありません。

○学級経営……異学年集団であることを生かして、支持的風土<sup>※1</sup>づくり等の学級の支え合う雰囲気醸成することが大切です。

※1「支持的風土」とは、失敗や間違いが気持ちよく受け入れられる環境。どの子どもにとっても居心地がよい環境。学び合いのある環境をいう。

○指導上の基本姿勢としては、

①教師が教え込むという立場ではなく、児童自らが学んでいく立場から学習指導過程を組むようにする。

②2つの学年の学習内容を分析し、類似内容指導、同内容指導<sup>※2</sup>を明確にする。

※2…P12「同単元指導」参照

③一斉指導に終始することないように、学習形態や資料、教材、教具、の工夫をし、一人ひとりが意欲的に学習に取り組むようにする。

④学習の進行に必要な約束(きまり)を明確にし、複式指導の中で、児童だけでも学習が進められるように学び方を定着させる。

## 6. 複式学級を生かした教育課程編成における留意点

### (1) 教育課程の編成

教育課程を編成するとき、まず法令で定められている学校教育の目的や目標に基づき、児童や地域、学校の実態を踏まえて教育目標を設定します。次にそれらの目標を達成するために、各教科等について、授業時数との関連において総合的に組織した教育計画を作成します。教育課程は、全教職員の協力のもと、校長の責任において編成します。

さらに、学校全体として、教育目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実現状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと等を通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（カリキュラム・マネジメント）に努める必要があります。

## (2) 小規模学校における教育課程編成上の留意点

複式学級は、小規模であるという特性をもっています。小規模学校における教育課程編成については、次の点に留意する必要があります。

- 小規模校の特性を生かす教育課程の編成を工夫します。少人数のよさに目を向け、児童一人ひとりのよさや可能性を把握し、個に応じた指導を可能な限り実施します。また、恵まれた自然環境や伝統的行事・文化等、地域の資源を生かし、特色ある教育活動を展開します。さらに、地域における開かれた学校をめざし、地域連携の在り方を検討し、地域の教育力を生かします。
- 1日の生活時程や週当たりの授業時間表を作成する場合には、児童の通学距離や交通条件あるいは季節等に十分配慮します。
- 現状より、多人数での活動がより効果的であると判断される場合には、合同での学習を工夫します。【合同学習】
- 近隣の小学校や中学校との交流や地域との交流を積極的に行います。【集合学習】【交流学习】
- コンピュータ等の情報機器の活用を工夫し、情報の活用、発信を通して児童の視野やつながりを広げるとともに他校との交流を図り、幅広い見方・考え方を身に付けさせ、多くの人々とのかかわりを通して自主性や積極性を育みます。

## (3) 複式学級における教育課程編成上の留意点

複式学級では、2つの学年の児童で1つの学級が編成されている関係上、異なる学年が、同じ内容によって同時に学習する等、単式学級とは異なった学習形態や指導方法で学習する場合があります。

そのため、学習指導要領に示されている各教科の学年別の目標、内容や学年別に編集された教科書の内容の順序によりがたいことが生じます。そこで、学習指導要領総則「第2教育課程の編成 3教育課程の編成における共通的事項 (1)内容等の取扱い オ」において、

学校において2以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合には、各教科及び道徳科の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科及び道徳科の目標及び内容について学年別の順

と規定し、特例として認めています。

教科等によっては、学年別の順序によらない同単元同内容同程度(A・B年度方式)等の指導計画を作成して指導する場合がありますが、その法的な根拠は、この学習指導要領総則の記述にあります。

ただし、学年別の順序によらないことが認められているのは、「2以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合」のみであり、単式学級においては、学年別の順序による必要があります。複式学級の教育課程編成については、この特例の趣旨を踏まえ、次の点に留意する必要があります。

○複式学級においても、「特に必要がある場合には」、「目標の達成に支障のない範囲内で」という趣旨に留意する必要があります。学年ごとに目標や内容が示されているのは、順序性や系統性に配慮されているからです。例えば、理科の「電気の通り道」(3年)と「電気の働き」(4年)、「物の溶けかた」(5年)と「水溶液の性質」(6年)等、学習に順序性や系統性がある内容については、学習の順序が逆にならないようにしなければなりません。

○複式学級における教育課程の編成の特例の趣旨を踏まえ、各教科等の複式学級の年間指導計画を作成します。

・学校教育法施行規則第51条の別表第1で示されているとおり、各学年において標準授業時間数が異なっていることに配慮すると同時に、第1学年と第2学年、第3学年と第4学年においては、学年の年間総授業時数が異なってくることに留意して年間指導計画を作成します。

○教科の特性や児童の実態に応じて指導形態や指導方法を工夫します。

・教科や児童の状況に応じ、弾力的に考えます。  
・間接指導の時間に十分学習効果をあげるために、児童が主体的に学習する力を高めま  
す。

## 7. 複式学級の授業方法

### (1) 学年別指導(複式指導)

複式学級で同時に両学年に指導を行おうとすると、どうしても学年別に交互に指導することになります。この方法を「わたり」といっています。その際、一方の学年に指導している間、もう一方の学年は自学自習の学習方法をとっています。前者を直接指導、後者を間接指導といっています。間接指導は、学年別指導をした場合に、直接教師が言葉かけをしていない状況をいいます。間接指導といわれるのは、児童の自学自習の時間にも教師の指導が及んでいるからです。直接に言葉かけはしていなくても、その自学自習の進行について他の学年の指導にあたりながら、常に気を配る必要がありますし、自学自習の前に直接指導等によって、児童が学習の見通しをもてるようにしなければなりません。

#### ①直接指導

複式学級の学習指導では、直接指導の場面だけを「指導」と考えてしまいがちであることから、次のような状況を招くことがあります。間接指導の有用性を踏まえた直接指導の在り方について考える必要があります。

- 直接指導の時間の指導内容が量的に多くなりがちになったり、指導の進度が速くなりがちになったりする。
- 教師の一方的な教授が多くなり、結論だけが強調されがちになる。
- 教具や資料等を用いず、教師の言葉だけの指導が多くなりがちになる。
- 指導が一斉指導の形態に固定され、個に応じた指導がなされにくくなる。
- 学習指導が一方の学年のみに行われがちになる。

#### ②間接指導

間接指導の時間は指導が「空白」になる時間と捉えられてしまうことがあります。そのため、複式学級は単式学級の半分の学習効果しかあがらないのではないかという心配が生まれてきます。実際の指導でも、間接指導の時間は直接指導とつながらないドリルや作業に終始してしまう事例もあるようです。複式学級の学習指導の効果を高めるためには、児童がこの間接指導の時間に積極的に学習できるようにすることが大切です。そのためには、教師自身がこの間接指導の時間の意義を認めることが必要です。

つまり、間接指導の場は、児童の自発的な学習態度を育てるための絶好の指導の場であるという指導観に立って、毎時間の指導過程を考えることが大切です。なお、間接指

導の時間に限らず、直接指導や単式学級の指導においても、一人でじっくり考える、数人で話し合う、討論する、繰り返し練習する等、様々な「間接指導」を取り入れる必要があり、間接指導の有用性について改めて考える必要があります。

間接指導の時間に、児童が自発的・自主的に学習するためには、少なくとも次の4点について留意することが必要です。

- 学習の目標や流れをはっきりつかませるようにすること
- 学習の約束(きまり)<sup>※1</sup>について、児童とよく話し合っておくこと
- 学習指導の効果をあげるために、課題提示の仕方を工夫すること
- 直接指導の時間に学習の進め方のモデルを教師が姿で示すこと

※1 複式学級において、教師が一方の学年やグループの指導にあたっている時は、もう一方の学年やグループの児童は原則として教師に話しかけないというような簡単なきまりや、声の大きさを各自がその場の状況によって調節することによって、上下両学年の声が錯そうすることで生じる混乱や停滞を克服することが可能となります。また、個人学習からペア学習へ、さらにグループの学習へといった学習形態に関わるきまりがあると、話し合い方に見通しをもって学習することができます。複式の学習効果を高めるためには、こうした学習のためのきまりづくりを大切にする必要があります。もちろん、学習規律づくりだけに力が入りすぎて、子どもらしい自由な活動を極度に制限することのないよう注意することも大切です。

また、間接指導の時間に学習する内容は、その時間の直接指導の内容と関連のあるものの方が好ましいといえます。よく、他教科のプリント等、その時間の直接指導の内容と全然関連のないものが取り上げられることがあります。このような方法をとる場合、複式学級の指導の良さが生かされないということになって、学習の効果は期待できません。

### ③「わたり」と「ずらし」

複式学級の学習指導において、直接指導、間接指導が行われるにあたり、「わたり」や「ずらし」が行われます。これらは複式学級の学習指導特有の用語です。

#### ○わたり ……………

複式学級では2つの学年の児童が同時に学習するわけですから、教師としては、学年差や能力差に対する指導上の配慮が必要になります。そこで、両学年の間や、グループの間を移動して指導することになります。このように「渡り歩く」指導形態のことを、「わたり」とよんでいます。

#### ○ずらし ……………

わたりの指導形態においては、直接指導と間接指導の時間があります。そのためには、学習過程を組むとき、両学年あるいは各グループが同時に直接指導の時間にならないよう、どちらか一方を「ずらし」、交互にわたりができるようにするわけです。学習過程の場면을「ずらす」ためには、各場面の学習内容や学習時間に無理のないようにすることが大切です。このように、学習の場면을ずらすことを「ずらし」とよんでいます。各学年の1単位時間の中での学習過程の場면을、①課題把握→②追

究Ⅰ→③追究Ⅱ→④考察の4場面として考えたとします。単式学級で授業をするならば、①から④の場面がそれぞれの教室で同時に展開されます。

しかし、複式学級において、課題把握の場면을教師が直接指導したいと考えた場合、一方の学年が課題把握を行っている間、もう一方の学年は場面をずらして、別の場面の内容に取り組みます。これが「ずらし」です。ずらすことにより、どちらの学年の課題把握も教師による直接指導が可能となります。

学習の進展過程や内容によって、どちらの学年をずらしてもかまいません。いずれにしても、ずらしたことによって、時間的に間接指導の時間が生じます。そこで、たとえば、終わりの時間帯に発展的な問題を設定したり、次時の導入として課題把握の時間にしたりするといった工夫が考えられます。一方、初めの時間帯では前時までの学習を振り返る時間や、前時の学習内容の発展課題に取り組む時間にするといった工夫が考えられます。あくまで基本型であり、弾力的に考える必要があります。

これらの「わたり」「ずらし」といった複式学級の学習指導特有の用語があることから、複式学級指導は特別な指導であるといった印象をもつかもかもしれません。複式学級指導に取り組んだばかりの時期には、「今日は計画通りうまくわたれた」といった教師自身の動きのみを取り上げ授業を評価しがちになります。授業を振り返る際に大切なのは、「その時間の目標を見童が達成するための教師の支援としてわたるタイミングは有効であったか」、「ずらしは効果的であったか」ということであることを忘れてはいけません。よい授業は、「教師がうまくわたれた授業」ではなく、「見童が目標を達成できた授業」です。

#### ④ガイド学習

ガイド学習は、間接指導をより充実させるために考え出された学習の形態の一つで、学習集団の中から「ガイド」役の見童を決め、そのガイドが教師との話し合い等により立てた学習進行計画にそって授業を進める方式です。学年別指導の中で、以前から様々に工夫さ



れ、取り入れられてきました。ガイドを中心に児童が協力して学習することで、間接指導の質を高めることをねらいとしています。ガイド学習は、間接指導を効果的に進めるだけでなく、児童の集団意識を高め、社会性を育てることや、教師の指導による受け身の学習ではなく、主体的、能動的に学習する態度を養うことを目指します。学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」というキーワードに代表されるように、単式、複式といった学級編制の形態に関わらず、主体的、能動的な学びの充実が求められています。1時間中教師の声が響く授業スタイル、教師のこまかな指示を受け児童が活動する授業スタイルから、児童が主体となって児童の声で学習を進める授業への転換が必要です。そういった意味で、このガイド学習は今求められている授業のスタイルそのものともいえるでしょう。ガイド学習は、低学年、中学年、高学年と、発達の段階に即して、単純な学習から複雑な学習へと移行していきます。低学年や初めて複式学級となった学級においては、ガイドは例えば教師の作成した「学習ガイド」(カード)をもとに進行する経験を重ね、ガイド中心に学ぶ学習集団づくりの基礎を養います。そのような経験を積み重ねながら、中学年、高学年と進む中で、学習ガイド(カード)がなくても進行できるようになり、さらには、話し合いの学習において、話し方や聞き方の積み上げによって、既習の知識と関連させながら、また他者の発言と自らの考えを関連させながら考えたり発言したりできるようになっていきます。学級のだれもがガイドとしての役割が果たせるように順番に経験を重ねていくことで、より協力的に、主体的に学ぶことのできる集団に育ちます。

(ア) ガイドの役割

ガイド学習におけるガイドの役割(例示)

1 学習の準備を確認する	複式学級においては、特に児童が学習準備に参加することが大切です。ガイドに限らず、児童全員が準備をしながらどんな資料や教材を使って、どんな活動を行うか予想することができ、主体的な学びへつなげることができます。
2 学習の進行をする	学習の進行は、ガイドの役割の中心といえます。学習を進行するには、学習のねらいや内容の見通しがもてていることはもちろん、進行の手順も定まっている方が好ましいといえます。
3 学習の約束(きまり)を確認する	学習技能の定着と同時に、話し合い活動を展開するガイド学習においては、学習規律を整える仕事がとても重要です。ガイドを中心に互いに声をかけあいながら学習規律を整えていけるようにします。

4 学習の目標・まとめを確認する	学習を進めていく中で、早く目標が達成できる児童や、じっくり時間をかけて取り組む児童等、個によって違いがあります。ガイドは、他の児童とも協力しながら、全員が目標を達成できることを目指します。
------------------	--

[参照：へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学習指導（指導方法）. 全国へき地教育研究連盟編, 平成元年3月31日]

### (イ) ガイド学習の留意点

- 学習ガイド(カード)には、ガイドがそのまま読んで進行できるよう、下図に示すように、話し言葉で流れを書いておく等の工夫をします。経験を重ねれば、簡単な進行メモで学習が進められるようになります。
- ガイド学習は、始めて間もなくの慣れない間は、ガイドだけでなく学習集団全員に学習ガイド(カード)を配付するなどをし、だれもが流れを理解し、助け合いながら学習を進められるようにします。
- ガイド学習を始めて間もなくは、リーダー性のある児童をガイドにすると学習が進めやすいですが、学級のだれもが順番にガイドとしての役割ができるように経験を重ねていくことで、より協力的に、主体的に学ぶことのできる集団に育ちます。
- ガイドの進行がうまくいかず、話し合い等の学習活動が停滞していた場合、すぐに教師がガイドにとって代わるのではなく、どう進めたらよいかについてガイドを支援します。時には教師がガイド役をやって見せる(例示する)方法もあります。教師が、ガイドの進行のよさをほめ、価値付けることで、ガイドが自信をもって進行できるようになっていきます。ガイド学習は、ガイドの児童が教師との分業で学習を進行することだけが目的ではなく、学習の仕方を学んだり、主体的な学習態度を身に付けたりすることを目指して取り組んでいくことが大切です。
- 両学年ともにガイド学習をする同時間接指導においては、教師はどちらの学年にも気を配り、全体を見渡し、必要に応じてガイドやそれぞれの学習集団を支援する必要があります。学級のガイド学習についての成熟度が高まり、経験を重ねる中で、学習集団が「自ら学ぶ集団」へと育っていき、教師の出番も少なくなってきました。児童の主体的な活動を通して、よりねらいにせまる学習となるよう支援することが大切です。
- 学習ガイド(カード)記入例

- 1 「今日の学習をはじめます。今日のめあてを読みましょう。」
- 2 「今日の日付とめあてをノートに書きましょう。」

- 3 「今日の問題を読みましょう。」
- 4 「意味の分からないところはありませんか。」
- 5 「15分まで、考えてください。」  
(中略)
- 9 「自分のとき方を発表してください。」
- 10 「付けくわえや別の考えはありませんか。」
- 11 「質問はありませんか。」
- 12 「今日のめあてをもとに、学習をふりかえります。ふりかえりをノートに書きましょう。」  
(後略)

## (2) 同単元指導

2個学年を同じ単元(教材)によって指導する。原則的には隣接する2個学年の少人数の児童で編制されているという複式学級の形態を生かし、指導の効率化、深化を図り、児童の協力的学習を促すことを重視し、共通するねらいをもった学習内容を組み合わせて同時に指導することです。

### ① 同単元類似内容指導

2個学年の児童に対して類似の内容を指導します。例えば、算数科において「特徴や傾向を調べること」は、第3・4学年で共通で学習する内容です。そこで、第3学年の児童に、「表と棒グラフ」、第4学年の児童に「表と折れ線グラフ」を指導することがあります。こうした指導では、学級内の児童が同じような問題に取り組むので、好ましい雰囲気をつくることができます。また、前述の複式学級の特性を生かすことも可能ですが、一方ではそれぞれの学年において類似する内容をうまく組み合わせるといった工夫も必要となってきます。

### ② 同単元同内容指導

2個学年の児童に対して同一内容を指導します。これは、指導の目標と内容の同一性を追究したもので同内容指導といわれます。この指導は、単式学級での指導に近いものがあります。同内容指導を行う場合、学年の違いによって、実現すべき目標の程度を変えることがあります。これを、「同内容異程度指導」と呼称しています。これに対して、学年の区別をしないものを、「同内容同程度指導」と呼称しています。

## (3) 合同授業(2学級以上の児童と一緒に学習をする学習形態) 合同体育や全校音楽

複式学級や欠学年があり少人数の学級で学習しなければならないという実態がある場

合に、多人数での学びによってもっと学習意欲を高めたい、経験領域を広げたい、社会性を伸ばしたいという意図で、学級や学年の枠をはずした学習集団を編成して学習する形態を合同学習といいます。例えば、低学年と中学年と一緒に学習したり、下学年(1・2・3年)と上学年(4・5・6年)に分かれたりして学習する形態があります。集団の規模を大きくすることによって、集団で思考する力を伸ばしたり、多人数での活動を楽しんだり、協力して活動するよさを感じたりすることができるようになります。少人数であるために、学習活動を十分行うことができない活動の例としては、

- ・多様な考えを交流させ、新たな見方や考え方を構築する学習活動
- ・体育でチームプレーを必要とする活動
- ・音楽の合奏や合唱 等

があげられます。合同学習の実施にあたっては、以下の点に配慮します。

○合同学習のねらいを明確にする。

○学習効果を高めるために各学級担任の協働体制を築く。

合同学習においては、複数の教師による指導体制がとられますが、指導の立案、実施にあたっては、主担当を中心に、その他の教師による協働によって進めます。

○各教科等に留まらず、学校経営全体の計画へ位置付ける。

合同学習は、「写生会」「音楽会」「運動会」等の学校行事に関連して、教科の学習が全校一緒に行われる場合がありますが、各学校において十分検討し、年度当初に綿密な指導計画を立てて実施することによって、効果があがります。

○学年差や個人差等を考慮し、一人ひとりの児童に細かく配慮する。

学年により能力差の異なる児童が共通の学習課題に取り組み、充実感、満足感をもって学習の喜びを味わえるようにするため、教師は一人一人の実態を的確にとらえ、それをふまえた指導計画を立て、適切な指導法を用いる必要があります。

○下学年の児童の自主性・主体性が伸ばせるよう配慮する。

上学年と下学年の組合せで行う合同学習では、下学年の児童は上学年の児童に頼りきってしまう姿がよくみられます。そのため、下学年の児童の自主性・主体性を培うためには、十分な配慮をすることが大切です。

○時間割の編成を工夫する。

合同学習は、音楽、図工、体育、特別活動(単式学級であっても小規模の場合は生活

の学習も)等幅広く行われていますが、時間割も合同学習を行いやすいよう配慮しておきます。

例えば、中学年と高学年の合同で音楽を行うことが予想される場合、中学年の音楽を3時間目に、高学年の音楽を4時間目に担当しておき、中学年の4時間目は担任の担当教科を、高学年の3時間目は高学年の担当教科を位置付けておくことで、自由に動かすことができるようになります。

#### (4) 集合学習(近隣の2校以上の児童を一か所に集めて学習する学習形態)4校交流

合同学習の実施によって集団の規模を大きくし学習を進めれば効果はありますが、身体差、能力差の問題を解消するためには困難な面もあるようです。そこで、同一学年の集団規模を大きくし、高め合うために考えられたのが、隣接校との集合学習です。全国の多くの学校で、近隣校同士で工夫して行われてきている例が多数見られます。2校以上の児童が集合し学習するため配慮することも多くありますが、児童にとっては新鮮な活動経験にもなるとともに、能力を発揮するよい機会となりますし、複数校の集合であるため教員の専門性をより生かすこともできます。総合的な学習の時間で毎年一緒に活動する等、実施校同士の連携により集合学習が定着しているところもあります。主な活動には、学校行事や、各教科等の学習があげられます。集合学習のできる望ましい学校間の条件には、

- 両校が近距離にあり、移動のための交通機関が確保できること。
- 学校の立地条件(海辺の学校、山の学校等)が似かよっていること。
- 児童の生活環境、生活経験がおおよそ共通していること。
- 両校の児童保護者に理解があること。

があげられます。移動のための交通機関が確保できることが、集合学習を可能にするうえで特に大切な条件となります。

集合学習の実施にあたっては、以下の点に留意します。

- 集合学習のねらいを明確にする。
- 年間指導計画に位置付け、計画的に取り組む。
- 協力的な指導組織づくりをする。指導の効果が高められるよう各校の教師の指導組織づくりをし、指導案にも位置付けます。
- 事前・事後の指導を充実させる。集合学習のねらい等を見童に伝え、事前指導を十分

に行い、進んで学習できるようにします。また、事後には振り返りを行い、以後の学習に自信と意欲をもたせるようにします。

○活動の記録をとり、児童の姿をもとにした振り返りを教師間で共有し、次の活動に生かす。

(5) 交流学習(学校規模や生活環境の異なる学校同士が、姉妹校的な関係を結び行う学習方法、学校行事をいっしょに行う、電子メールの交換やビデオ会議、特別支援学校とのふれあい活動などもこれにあたります)

全く異なった環境の中で学習や生活を体験させることにより、児童の生活経験を広げ、豊かな人間性を育てたいという意図により生まれた学習形態です。ICTや先端技術を活用し、遠隔での授業により一緒に学習することも可能になってきました。地方の学校と都市の学校、山間地の学校と海辺の学校が交流し、互いの学級で学習したり生活したりします。県内同士、または県境を越えて、交流学習を行ってきた例も多くあります。日数は、一日の場合や数日間ということもあります。他校と交流することによって、多様な情報による視野の拡大や、社会性がより豊かになる等、互いの学校の学習の質を高めるうえでも効果があります。交流学習を実施するにあたっては、以下の点に留意します。

○交流学習のねらいを明確にする。

○学校間で協議したうえで、年間指導計画に位置付け、計画的に取り組む。

○交流する学校のある地域や学校の実態について、事前の打ち合わせで、教師が十分に把握しておく。

○協力的な指導組織づくりをする。

○事前・事後指導を行い、交流学習をより効果的に実施する。

交流する学校のある地域や、学校の実態、実施のねらい等を見童に事前に伝え、さらに保護者や地域の理解、協力も得て交流学習を行うことで、見童がより主体的に取り組むことができるようにします。交流学習の後も、手紙や電子メールによって各校での学習の成果等を継続して交流することで、それぞれの学校での学びの深まりが期待できます。

## 8. 複式学級の学習指導過程

複式学級における学習指導過程は、学習する教科や内容、指導方法によってさまざまですが、

児童が毎時間具体的に課題を解決するための基盤となるものです。複式指導を効果的に進める学習段階として、一般的に次のような学習プロセスが考えられます。

学習プロセス	指導上の留意点
①問題把握	○本時のねらいを明確につかみ、意欲を持たせる。(課題設定)
②課題追求	○仮説を持ち方法を考え、解決に向かって努力をする。(解決努力)
③解決・定着	○解決した結果を確かめ、類似の問題を解きまとめる。(定着)
④活用・発展	○発展的な課題の解決に努めたり、活用場面を考えたりする。 (習熟・応用・評価・発展)

## 小規模校・複式学級指導の特性を積極的に生かす教育の推進

### 一人一人のよさを生かす 個に応じた指導の充実

- ・少人数の利点を生かし、実態把握と、きめ細やかな指導を大切にする。
- ・個々が感じ、考え、試みたことを指導に生かす。

### 学校周辺の豊かな自然環境を 生かした教材や体験活動の充実

- ・恵まれた自然環境を教材化する等、体験活動に生かす。
- ・地域や自然を愛する心情やたくましく生きる心、生命を尊ぶ心、自然環境を大切にする心等、豊かな心の育成を図る。

### 自学自習の経験の積み重ね

- ・既習事項や生活体験を生かしながら、思考・判断・表現し、課題を解決していくような学習を保障する。

### 地域住民との連携、 協働による教育活動の展開

- ・地域と学校の間を密接にする。

### 全教職員の一体となった 指導体制づくり

- ・小規模な教職員組織を生かし、共通理解を十分に生かす。
- ・全教職員が機能する学校運営を目指す。(教職員個々の役割を明確にし、全教職員が有機的に機能することが大切である)

### 他の学校との交流

- ・学習指導や生徒指導の連絡会を設ける。
- ・近隣の小学校や校区の中学校との学校行事、自然体験活動、クラブ活動や部活動、ボランティア活動等により、教育課題の解決に迫る。
- ・コンピュータ、情報通信ネットワーク等を活用する。
- ・特別支援学校等との交流を図る。

図 15 低学年の展開例 算数 第 1 学年 「3つのかずのけいさん」 第 2 学年 「ふえたり へったり」

(出典：複式学級新任担当者研修（隠岐会場第 2 回）、隠岐の島町立北小学校、令和元年 1 0 月)

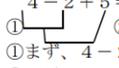
第 1 学年	主な学習活動		第 2 学年	主な学習活動	□支援 ★評価
<p>□支援 ★評価</p> <p>□見通しを持って学習に取り組むことができるように、学習の流れを全体で確認する。(掲示)</p> <p>□題意を正確に捉えるために次のような流れで、問題文の確認をする。</p> <p>①線を引く。 わかっていないこと→青 間い→赤</p> <p>②1文ずつ、増えるか減るかを考えて問題文に書きこむ。</p> <p>③バスの模型から実際に動物を下ろし全体で確認する。</p> <p>□思考の軌跡を残すために、降りた人を表すブロックは、ホワイトボードに残し、降りたことがわかるようにすることを助言する。</p> <p>□机間支援をして、わかりにくい表現については、真意を問い、考えを整理する。</p> <p>□質問のパターンを示し、式の意味や計算の仕方を児童同士のやりとりで整理できるようにする。</p> <p>・～は、何の数ですか。 ・どうして、～をするのですか。</p> <p>★減増の場面でも、一つの式に表すことができたか。(ワークシート)</p>	<p>1、百玉そろばん・プリント</p> <p>2、前時までの学習を振り返る。 ・はじめの数から増えるときは順番にたす、減るときは順番にひくと、答えがわかったよ。</p> <p>3、本時の問題場面と学習課題を把握する。</p> <p>【問題】 きたっこバスには、はじめに4にんのつていました。 きたしょうで、2りおりました。 いごのバスでいて、5にんのつてきました。 バスには、いま なんにんのつていますか。 バスには、いま何人乗っていますか。</p> <p>【学習のめあて】へって、ふえるおはなしのときも、1つのしきにあらわせるか考えよう。</p> <p>4、ブロックを操作して、問題を解く。</p> <p>5、全体で話し合う。 はじめ4にん □□ □□→ ←■■■■■ 2りおる 5にんのる バスにのっているのは、7にん。</p> <p>6、ブロックの操作を式に表し、計算する。</p> <p>7、全体で話し合う。 ●一つの式で ・<math>4 - 2 + 5 = 7</math> ・はじめ4人のバスから2人おるから <math>4 - 2</math>、そのあと5人乗るから <math>4 - 2 + 5 = 7</math>で、バスには7人乗っています。 (予想されるその他の考え) ・<math>4 - 2 = 2</math> <math>2 + 5 = 7</math> ○順番に表している 2つの式で解く・・・ ・<math>4 - 2 + 5</math> ○式に表している 立式できたが、計算していない。 ・<math>4 + 2 + 5 = 11</math> ○前時の学習を使おうとしている ・<math>4 - 2 - 5</math> ○前時の学習を使おうとしている</p> <p>8、計算の仕方を確認する。 ・<math>4 - 2 + 5 = 7</math> ①  ② ・①まず、<math>4 - 2 = 2</math> ②つぎに、<math>2 + 5 = 7</math> 答えは、7人。</p> <p>【学習のまとめ】へってふえるときは、ひいたあと、たす一つのしきにかくことができる。</p> <p>9、練習問題を解く。</p> <p>10、学習を振り返る。</p>	<p>⑥</p> <p>つかむ</p> <p>⑥</p> <p>つかむ</p> <p>④</p> <p>やってみる</p> <p>③</p> <p>学び合い</p> <p>⑦</p> <p>やってみる</p> <p>③</p> <p>学び合い</p> <p>⑦</p> <p>やってみる</p> <p>③</p> <p>学び合い</p> <p>⑦</p> <p>深める・まとめる</p> <p>⑮</p>	<p>1、前時の学習を振り返り、本時の学習課題を把握する。</p> <p>【問題】 北っこバスには、はじめに24人乗っていました。 ふせのバスでいて、8人おりました。 うずきのバスでいて、2人おりました。 バスには、いま何人乗っていますか。</p> <p>【学習のめあて】 こたえの人ずうを計算するいろいろな方法を見つけよう。</p> <p>2、問題を解く。</p> <p>3、全体で話し合う。 (出会わせたい考え) はじめ24人 □□□□□□□□□□ ■■■■■■■■■■→←■■ 8人おりて2人おると 10人おると ・<math>8 + 2 = 10</math> ・<math>24 - 10 = 14</math> 14人 ・バスを降りた人を全部たしてまとめます。 <math>8 + 2 = 10</math> その次に、はじめの24人から降りた人10人をひくと、バスに乗っている人は、14人です。</p> <p>(予想されるその他の考え) ・<math>8 + 2 = 10</math> ○おる人は捉えている <math>24 + 10 = 34</math> ・<math>8 - 2 = 6</math> <math>24 - 6 = 18</math> ○ひき算の意味理解 ・<math>8 + 2 = 10</math> <math>24 - 8 - 2 = 14</math> ○時系列での式表現</p> <p>4、学び合いでわかった問題の解き方を整理する。</p> <p>【学習のまとめ】順番ににひくやり方やへった数をたしてまとめて、そのあと、はじめの数からひくやり方もある。</p> <p>5、練習問題を解く。</p> <p>6、学習を振り返る。</p>	<p>□支援 ★評価</p> <p>□見通しを持って学習に取り組むことができるように、学習の流れを全体で確認する。(掲示)</p> <p>□題意を正確に捉え、自力で解決できるように、次のような流れを取り入れる。</p> <p>①線を引く。 わかっていないこと→青 間い→赤</p> <p>②図を描いて考える。 ③式を立てる。</p> <p>□児童の思考を助けるために、考えをまとめるワークシートに、 ①降りた人の数は何人かな。 ②順番に計算する方法もできるかな? の視点を示しておく。</p> <p>□出会わせたい考えが出ないときは、視点①と図を用意して、様子を見て提示する。</p> <p>□1年生のやってみようの時間を使って2年生の学習の様子を見る。必要に応じて声をかける。</p> <p>□主体的に学び合いが進められるように、 ・まだ途中の人、よくわからない人から発表する。 ・発表者は、「～でしょう。」 「ここまで、わかりましたか。」等の言葉を使い、短い間隔で確認する。 ・聞き手は、発表者の確認に対して、意見や質問があれば、発表する。 ・発表者の考えが誤答の場合、やり取り取りをしながら訂正していく。発表者が訂正することが難しい時は、交代する。</p> <p>□どの考えも良いところと分らないところとあることを書き残すよう助言する。</p> <p>□学び合いの様子から、意図的に指名する。 □何も書いてない用紙を準備する。 補助発問 どんなやり方が見つかりましたか。</p> <p>★順にひく式と、減量をまとめた式に表すことができたか。(観察・ワークシート)</p>	

図 16 中学年の展開例 算数 第3学年 「大きい数のしくみ」 第4学年 「わり算の筆算(2)」

(出典：複式学級新任担当者研修(西部会場第2回)、邑南町立阿須那小学校、令和元年9月)

■：直接指導    ▨：同時間接指導(網掛けは軸足を置く学年。)    ◎：活動の見通し

3年生【展開例A：基本展開例】		関わり	4年生【展開例B：思考力を伸ばす授業展開例】	
支援(○) 評価(・)	学習活動 予想される児童の反応(・)		学習活動 予想される児童の反応(・)	支援(○) 評価(・)
<p>○桁数を予想した後で位ごとに数を示す。</p> <p>○数直線を使ってゲームをして問題をつかむ。16000を行きすぎるなど変化を加え、集中を促す。</p> <p>○数直線のカードを用意しておく。</p> <p>・数の構成を基に、数の多様な見方について考え、表現している。</p> <p>【考】(観察、発言、記述)</p> <p>○なるべくたくさん出すように声をかける。(式で表すと同じでも、式、言葉、図それぞれを認める。)</p> <p>○友だちの考えを聞きながら、自分の考えを書き加える姿を称賛する。</p> <p>○式の簡便さに触れる発言があれば称賛する。</p> <p>○数直線でも確認する。</p> <p>○代表が発表した考え以外にも発表できるようにする。</p> <p>○新たな表現ができるように意識づける。</p> <p>○身近なものから数を取り上げる。</p> <p>○+、-、いくつ分(×)の見方など意識して書けるようにする。</p>	<p>【つかむ・見通す】(5分程度) 問題場面を知る。</p> <p>◎たまったお小遣いを、どんなふうにもらいたいかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5桁なら○万円だ。</li> <li>・百の位は0か。</li> <li>・16000円か。</li> <li>・2万から4千戻ればいい。</li> <li>・千ずつ進むと、16こだ。</li> </ul> <p>16000はどんな数と言えるかな。</p> <p>【解決・創造(自分で)】(3分程度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・16000は1万と6千を合わせた数。</li> <li>・16000は2万引く4千。</li> <li>・16000は千が16個。 など</li> <li>・16000=15999+1</li> </ul> <p>【解決・創造(関わり合って)】</p> <p>①グループで考えを紹介しあい、他のグループが出しそうでない考えを一つ選ぶ。(5分程度)</p> <p>②ガイドが中心となり、全体で考えをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・16000=10000+6000</li> <li>・16000は100が160個。</li> <li>・言葉や数直線や式などで同じことを表せるね。</li> </ul> <p>【まとめる】(予想)</p> <p>数はたし算やひき算などいろんな見方ができる。式にすると言葉より短く表せる。</p> <p>【広げる】</p> <p>「23000人」に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・23000=20000+3000</li> <li>・23000=30000-7000</li> <li>・23000=1000が23個</li> </ul> <p>学習感想をノートに書く。(自ま)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさん見方があって面白かった。</li> <li>・買い物でも使えそうだな。</li> </ul>	<p>【復習】(5分程度)。 練習問題を解く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どンドン解けるぞ。</li> <li>・498÷6なども解けた。</li> <li>・まとめると、2けたや3けた÷1桁はとけた。</li> <li>・割られる数の桁数が増えても、同じことを繰り返せば解けそう。</li> </ul> <p>【つかむ・見通す】 問題場面を知る。</p> <p>色紙が60枚あります。この色紙を1人に□枚ずつ分けると、何人に分けられますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆算で解けば、÷5は12人。</li> <li>・÷8は十の位には商がたたない。あまりが出て、7あまり4だ。7人に分けられて、4枚あまる。</li> <li>・20はどうするといいかな。</li> </ul> <p>60÷20の計算はどうするといいのかな。</p> <p>【解決・創造(自分で)】(5分程度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆算で考えると、十の位には商がたたないぞ。</li> <li>・図をかいて考えよう。</li> <li>・10の束で考えると〜。</li> </ul> <p>【解決・創造(関わり合って)】 全体で考えをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図で考えると、20枚セットが2個。</li> <li>・筆算ではどう考えるといいかな。</li> </ul> <p>60÷20の筆算の仕方を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わる数が2桁でも、これまでと同じで商がたたなければ、位を下げるといいよ。</li> </ul> <p>【まとめる・広げる】 まとめを書く。(予想)</p> <p>わる数が2桁でもこれまでと同じように計算することができる。(何十と考えると商をたてやすい。)</p> <p>発展問題を解く。(90÷20)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・90÷20は10の束で考えて、4あまり1だ。</li> <li>・あまりは1ではなくて10だ。</li> </ul> <p>90÷20のあまりは1かな?</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あまりの1は、10の束で考えているので、10枚だ。</li> <li>・筆算でとくと、90-80で10だ。</li> </ul> <p>学習感想をノートに書く。(自ま)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わる数が2桁でも解けてうれしかった。</li> <li>・計算は大体、前の勉強を使えば解けるな。</li> </ul>	<p>○既習事項の振り返りをさせる。</p> <p>○既習事項をまとめられるものを用意しておく。</p> <p>○情報ボックスからカードを引くことで、本時の問題に意識が向かうようにする。(5, 8, 20)</p> <p>○式の単位を確認させる。</p> <p>・10を単位としたり、筆算を使ったりして、何十でわる計算の仕方を考え、説明している。</p> <p>【考】(観察、発言、記述)</p> <p>○途中まででも考えを伝え合い、深めあう姿を称賛する。</p> <p>○筆算の仕方に疑問がわいていれば、それを共有する。</p> <p>○時間を短く設定して、疑問を共有しやすいようにする。</p> <p>○算数の世界を広げられたことを価値づける。</p>	

図 17 高学年の展開例 算数 第 5 学年「百分率とグラフ」 第 6 学年「資料の調べ方」

(出典：複式教育推進指定校事業授業公開、雲南市立西日登小学校、平成 30 年 12 月)

学習活動と予想される反応 [5 年]	指導上の留意点 (★：評価)	学習活動と予想される反応 [6 年]
<p>1 問題を読み、みんなで話し合う。 問①：3 試合の中でシュートがいちばんよく成功した試合はどれですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入った数やシュートした数が同じ試合は比べやすそう。</li> <li>・ 2 試合めと 3 試合めはシュートした数が同じだから、入った数が多い方がよく成功しているね。</li> <li>・ 1 試合めと 2 試合めは入った数が同じで、シュートした数がちがうから・・・。</li> <li>・ 半分より多いかどうかで比べられるよ。</li> </ul> <p>2 本時のめあてを確かめる。 問②：3 試合めと 4 試合めを比べると、どちらがよく成功していますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入った数とシュートした数もちがうから、どうやって比べたらいいのかな。</li> <li>・ どちらも半分より多く入ってるけど・・・。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>入った数とシュートした数がちがうときの比べ方を考えよう。</p> </div>	<p>[5 年]図表を示し、入った数とシュートした数を一緒に確認する。</p> <p>[6 年]ワークシートの数直線上に卵の重さを表すことで散らばりの様子に目を向きやすくする。</p> <p>[5 年]学習リーダーを中心にどのように比べたのかが分かるように、大事な言葉を板書に残しておくよう伝えておく。</p> <p>[6 年]東小屋と西小屋の 2 つの立場に分かれて考えさせる。卵のサイズ規格を伝え、アピールポイントを考えるヒントにする。</p>	<p>1 東小屋と西小屋の卵の重さを、数直線の上に表す。</p> <p>2 問題を読み、本時のめあてを確かめる。 問：にわとり小屋の経営者になって、○小屋の卵を売るためのアピールポイントを話し合しましょう。</p> <p><u>卵のサイズ規格</u> S:46~52 未満 MS:52~58 未満 M:58~64 未満 L:64~70 未満 LL:70~76 未満</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>数直線を見て、どんなことがアピールできるのかたくさん考えよう。</p> </div>
<p>3 自分の考えをかく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 図で並べて考えてみようかな。</li> <li>・ シュートした数から入った数をひいて、入らなかった数で比べてみよう。</li> <li>・ 3 試合めに 1 本ずつ入った数と入らなかった数をたしたら 4 試合めと一緒になるから同じじゃないかな。</li> <li>・ 入った数がシュートした数を同じにすることはできないかな。</li> <li>・ シュートした数を 1 とみて、式で考えよう。</li> </ul> <p>4 みんなで比べ方を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ シュートした数から入った数をひくと、どちらも差が 6 本だから同じになると思う。</li> <li>・ 1 ずつたした数になっても同じとは言えなかったよ。</li> <li>・ こみぐあいを比べたときは、差で比べることはできなかったよ。</li> <li>・ シュートした数を 60 で考えると、入った数は 3 試合めが 48、4 試合めが 45 になるよ。</li> <li>・ どうやって数をそろえればいいのか。</li> <li>・ シュートした数を 1 とみると、入った数は 3 試合め 式 <math>8 \div 10 = 0.8</math> 4 試合め 式 <math>9 \div 12 = 0.75</math> になるよ。</li> <li>・ 0.8 や 0.75 って何を表しているの。</li> </ul>	<p>[5 年] 児童の言葉から 3 試合めと 4 試合めは入った数とシュートした数がちがうことを引き出し、めあてを確認する。</p> <p>[6 年]自分の考えがもちにくい児童には、前時に考えた比べ方や規格に合った卵がいくつあるかなど一緒に確認する。</p> <p>[6 年]話し合いが停滞したときには、教師も児童の立場になって話し合いに参加し、平均や散らばりの様子を考察できるようにする。</p> <p>[5 年]シュートの数を 1 とみて、入った数がどれくらいにあたるかといった割合の考え方が理解しにくいときには、こみぐあいの学習でも単位量あたりの大きさで比べたことを思い出させる。</p> <p>[5 年]小数の意味がとらえられないときは、半分入っているときの入った数はシュートした数の何倍になっているのかを考えさせる。</p> <p>[5・6 年] まとめでは、児童が板書した言葉を用いるようにする。振り返りでは、分かったことや友達の良いところ、次の学習につながるものを取り上げたい。</p>	<p>3 自分の考えをかく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平均を使って考えられないかな。</li> <li>・ 卵のサイズごとに考えたらどうだろう。</li> <li>・ 東小屋は真ん中の方に重さが集まっているのが特徴かな。</li> <li>・ 西小屋にはいちばん軽い卵と重い卵があるからそこがアピールできそう。</li> </ul> <p>4 みんなでアピールポイントを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東小屋は MS サイズになる重さの数が多いから、MS サイズをたくさん売ることができるよ。</li> <li>・ 西小屋には 73g で一番重い卵があるから L L サイズを売れるのはこっちだけだよ。</li> <li>・ 東小屋は全体の数や重さの合計が多いからたくさん売り出すことができるよ。</li> <li>・ 西小屋はいろいろな重さの卵があるからどのサイズの卵もとれるよ。</li> <li>・ 東小屋は M サイズの重さの卵が多いから、M サイズを売ることができるし、ちょうど一日で 6 個入りのパックができるよ。</li> <li>・ 西小屋は平均が 58g だから、西小屋も M サイズをたくさん売ることができるよ。</li> <li>・ 西小屋の平均は 58g だけど M サイズは 3 個だけだよ。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>平均や散らばりの様子を見ると、アピールポイントがたくさん見つかる。</p> </div>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>数がちがうときは、数をそろえたり、1 とみたりすると比べられる。</p> </div> <p>5 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入った数とシュートした数がちがうときは、数をそろえて解けばいいということが分かってよかった。</li> <li>・ シュートした数を 1 とみて、入った数がどれだけにあたるかを考えればいいのか分かった。</li> </ul>	<p>★[5 年]シュートがよく成功した試合を考えると、基準量をそろえる妥当性に気がつき、比べようとしている。</p> <p>★[6 年]アピールポイントを、平均や散らばりの様子など資料の特徴から考えている。</p>	<p>5 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東小屋のアピールポイントをたくさん見つけることができよかった。</li> <li>・ 平均は近くても、アピールできるところがちがっておもしろかった。</li> <li>・ 私が考えなかったことを友達は見つけていてすごいと思った。</li> <li>・ 散らばりの様子を見ると、いろいろなことが分かった。他の特徴も見つけてみたい。</li> </ul>

第1節 各教科の実践例

1 社会科学学習指導実践例

第5・6学年 社会科における一人一台端末を活用した実践事例

1 活動のねらい

一人一台端末を活用することで、調べたことを画像や文字を使ってまとめたり、お互いの考えを瞬時に交流したりすることが容易となる。これらのよさを間接指導に取り入れた実践である。

【使用した ICT】一人一台端末（Chromebook）・Jamboard・Google スライド・大型モニター

2 活動の内容

5年生

- (1) 単元名 「自然災害を防ぐ」
- (2) 本時のねらい  
日本の自然災害について、種類や発生状況、防災対策などに着目して問いを見出し、学習問題を考え、学習計画を立てることができる。
- (3) 本時の展開

6年生

- (1) 単元名 「日本とつながりの深い国々」
- (2) 本時のねらい  
自分が選んだ国の文化や行事について調べ、日本と比べることを通して、文化や行事の特色について理解することができる。
- (3) 本時の展開

・留意点 ★ICTの活用	学習活動	段階	学習活動	・留意点 ★ICTの活用
<ul style="list-style-type: none"> <li>★身の回りのニュースの画像を提示する。</li> <li>日本では、いつ、どこで、どのような自然災害が起きているのか話し合い、学習問題をつくろう。</li> <li>いつ、どこで、どのような自然災害が起きているのか調べさせる。</li> <li>★ジャムボード上の白地図にみんなが同時にまとめる。</li> <li>★災害の種類によって色分けすることで、地形との関係に気付かせる。</li> </ul>	1 自然災害の被害について知る。 ・大雪で車が進まなかった。 2 学習課題をつかむ。	直  間  直	1 課題を確かめる。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">             ○○（国名）には、どのような文化があるのだろうか。           </div> 2 調べる。 ・アメリカでは、ハロウィンなどの行事を家族と楽しむ。 ・サウジアラビアでは、イスラム教を信仰しており、1日に5回祈る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習計画を確認する。</li> <li>・自分が選んだ国を調べる。</li> <li>★自分が調べた国と日本の文化の類似点や相違点について、各自ジャムボード上で整理する。</li> </ul>
	3 調べる。 ・1995年に兵庫県で起きた地震は、高速道路が倒れてしまっている。 4 調べたことをジャムボードで整理する。		3 日本の文化と比べる。 ・行事を楽しむ点では、アメリカと日本は似ている。 ・サウジアラビアの宗教が中心の生活は、日本と大きく異なる。	

<p>★教科書をスキャンした画像を提示する。</p> <p>★みんなでジャムボードに予想を入力していく。</p>	<p>5 気付いたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然災害はいろいろな場所で起きている。</li> <li>・毎年のように自然災害が発生している。</li> <li>・いつ発生するか分からないので備えが大切だ。</li> </ul>	間	直	<p>4 ジャムボードの内容を発表する。</p>	<p>★ジャムボードをもとに発表する。詳しい発表は単元のまとめで行うため、簡単な発表で終わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめを書き終えたら、発表の資料づくりに取り組む。</li> </ul>
	<p>6 これまでの学習との関わりを考え、学習問題をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・台風や水害は、地形や気候が関係していた。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>自然災害は地形や気候とどのような関係があり、国や都道府県はどのような防災の取組を行っているのでしょうか。</p> </div> <p>7 学習問題に対する予想を考え、学習計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地震や噴火も、地形と関係があるのでは。</li> </ul>	直	間	<p>5 まとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>アメリカには、ハロウィンなどの行事があり、家族で祝う習慣がある。次はアメリカの産業について、詳しく調べたい。</p> </div>	

付箋機能を使った交流活動 (Jamboard)



児童が作成したプレゼンテーション (Google スライド)



- ・導入を間接指導で行う際には、しっかりと学習計画を立てる。
- ・学年別指導で ICT を活用していくためには、教室に大型モニターが 2 台必要となる。
- ・ICT を活用したプレゼンテーション資料の作成は、どの児童でも簡単にできるため、間接指導でも十分に取り組むことができる。

第5・6学年 社会科におけるデジタル教科書を活用した実践事例

1 活動のねらい

デジタル教科書を使用することにより、資料の拡大や動画の再生、インターネットを使った調べ学習、教科書を大型モニターに映しながらの発表、教科書をキャプチャした画像を使ったまとめ活動等が可能となる。デジタル教科書の効果的な活用を目指した実践である。

【使用した ICT】一人一台端末 (Chromebook) ・Jamboard ・Google スライド ・Google Classroom ・スプレッドシート ・デジタル教科書 ・大型モニター

2 活動の内容

5年生

(1) 単元名 水産業のさかんな地域

(2) 本時のねらい

つくり育てる漁業について調べを通して、携わる人々が品質を高める工夫や水産資源を守る取組を行っていることについて理解することができる。

(3) 本時の展開

6年生

(1) 単元名 武士の世の中へ

(2) 本時のねらい

源頼朝の挙兵や源義経の活躍などを調べを通して、源氏により平氏が滅ぼされ、源頼朝が征夷大將軍になり、鎌倉幕府を開いたことを理解することができる。

(3) 本時の展開

・留意点 ★ICT の活用	学習活動	段階		学習活動	・留意点 ★ICT の活用
★クラスルームで学習の流れを提示。  つくり育てる漁業はどのように行われているのだろう。  ・デジタル教科書で調べ、ノートにまとめる。	1 学習計画を確認し、学習課題をつかむ。	直	間	1 前時の内容を復習する。 ・平清盛は、娘を天皇のきさきにするなどして、大きな力をもっていた。	★ジャムボード上に、デジタル教科書の画像などを使ってまとめ、交流する。  ★頼朝の年表の一部を隠してスライドで提示する。
	2 調べる。 ・養殖は手間をかけて育てている。 ・水産センターでは、魚を育てて海に放流する栽培漁業を行っている。			2 源頼朝と平清盛の年表を見比べる。 ・清盛は頼朝の父を破り、力をもった。 ・頼朝は、伊豆に流されたが、平氏を滅ぼして征夷大將軍となった。	
・養殖は、手間をかけているからこそ、生産が安定していることをおさえる。 ・栽培漁業は「とる漁業」を支えていることに気付かせる。 ・消費者などのせりふを準備する。	3 発表する。 <養殖> ・歯切りなどの手間をかけてよりよい品質の魚を生産している。 ・手間をかけている分、生産が安定している。 <水産センター> ・病気への対応やウイルスの研究をしている。 ・水産資源を守り、安定して魚をとれるようにしている。	間	直	3 学習課題をつかむ。  源氏はどのようにして平氏をやぶったのだろう。	★ジャムボードに予想を出し合い、調べる観点を共有する。  ★デジタル教科書を使って調べ、ノートにまとめる。
	4 予想する。 ・平氏に不満をもつ人が味方をした。 ・戦いに強い人が現れた。			4 予想する。 ・平氏に不満をもつ人が味方をした。 ・戦いに強い人が現れた。	
		直	間	5 調べる。 ・頼朝は北条氏や東国の武士たちと兵を挙げた。 ・義経が率いた源氏の軍は次々と戦いに勝った。	

★ジャムボード上に意見を出し合う。	4 コメントを考える。 「養殖の魚は品質が心配だ」 ・病気やウイルスの研究をしているので、安心です。 「広い海には魚がたくさんいる」 ・魚は限りある資源です。	間	直	6 発表する。 ・頼朝は鎌倉で戦況を見守った。平氏を破った後、鎌倉に幕府を開いた。 ・義経は壇ノ浦で平氏を滅ぼした。 ・なぜ戦いで活躍した義経ではなく、頼朝が幕府を開いたのだろうか。	★デジタル教科書をテレビに映しながら発表する。 ・頼朝と義経がしたことを整理しながら板書する。
	★スプレッドシートに入力する。	5 まとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">つくり育てる漁業は、時間や手間をかけて大切に育てている。水産センターでは、水産資源を守っている。</div>	直		
★スプレッドシートに入力する。	6 振り返る。 ・栽培漁業の取組は、これからの水産業で大切だと思った。	間	直	7 頼朝が幕府を開いた理由を考える。 ・頼朝は武士の領地を認めたり、家来を守護や地頭につけたりと、武士の立場をよくしたから。	★スプレッドシートに入力させる。
・学習計画を確かめる。 ★スライドで資料を提示する。	7 次時の学習内容を確認する。 ・水産加工品がどのようにつくられているのか調べよう。				
		直	間		

デジタル教科書の画像を使ってまとめたものを発表する



デジタル教科書で調べたことをノートにまとめる



- ・予想を黒板に残すことで、前に戻って考えることができる。
- ・ジャムボードは、他の人の意見を参考にして意見を出しやすいが、一部の児童の考えに引っ張られてしまうことがある。自分の考えをしっかりとまとめる工夫が必要。

## 近隣校とのオンラインによる交流

### 1 活動のねらい

小規模校では、人間関係が固定化されてしまうことが多く、そのため、新たな仲間に出会うことに抵抗を感じる児童がいる。

本事例は、同じ中学校区にある小規模の小学校同士の交流を通して、新たな仲間と出会うことの楽しさを感じさせ、中学校進学への不安を少しでも和らげようとするものである。

### 2 活動の内容

(1) 参加者 H小5・6年生(18名) D小5・6年生(11名)

(2) 準備物 ・大型モニター ・PC  
 ・学校紹介と学校クイズ用資料(プレゼンテーションソフトで作成)

(3) 内 容

時間	内 容	留意点
13:30	オンライン Web 会議システムの準備。	・事前にホスト校を決め、必要なパスワード等を周知する。
13:50	オープニング。	
13:52	自己紹介。	・マイクをONにし、相手の反応が分かるようにする。
14:05	学校紹介。(各校3分程度) ・各校の行事の様子など。	・クイズの解答は、挙手や代表者の発言で行う。
14:15	学校クイズ。	
14:30	エンディング。	

他校の発表を聞く



スライドを使って発表する



一人ずつの自己紹介



## 小・中学校の代表者によるオンラインでの話し合い活動

### 1 活動のねらい

本事例は、同じ中学校区にある6小学校及び中学校のリーダー児童・生徒が、オンライン会議システムを使用し地域の課題について話し合うことで、自らの活動を通して地域全体をよりよいものにしていこうとする態度を養うものである。

オンライン会議システムで参加する



ヘッドセットを使用している話し合い



## 9. 複式学級における学習指導方法の工夫・改善

### (1) 教師の心構え

#### ①一人ひとりをよく理解すること

少人数であっても、一人ひとりの学習や生活の状況を理解することは、決して簡単なことではありません。学校内外の全ての時間的空間的諸条件が、一人ひとりをよく理解する材料となります。詳しく知るために、学習面や生活面等様々な角度から児童を観察し、よく理解することが大切です。一にも二にも、児童を丁寧に見取ることが、複式学級の指導では全ての出発点です。



#### ②「じっと待つ」心のゆとりをもつこと

少し困っている姿を見かけたら、それが児童の成長の好機ととらえ、まずしっかり見守りましょう。すぐに手助けしたり、早く進めようと引っ張りすぎたりしないようにします。学習の主体は児童です。教師は時に後方から見守り、しゃべりすぎないように気を付け、児童の学びの状況を見極めようとする心のゆとりをもちましょう。

#### ③過保護にしないこと

教師の親切心が知らず知らずのうちに、児童のやる気をそいだり、依頼心を高めたりすることがあります。特に、極小規模の複式学級の場合に気を付けます。今まで単式学級にいた教師が急に人数の少ない複式学級の担任になると、人数が少ないのだからしっかりはたらきかけようと思い、かえって児童の成長を阻害してしまうことがあります。教師が指導することと、児童にまかせることを、はっきり分けることが大切です。あくまでも、児童の主体性、自主性、創造性を育むことに主眼をおいた教育活動に取り組むことが大切です。

#### ④きびしさとやさしさを備えること

家庭的な雰囲気の中にも、教師は指導者であることを忘れないようにします。きびしさ、やさしさを合わせもった教師であることが大切です。

#### ⑤しっかりほめること

限られた人間関係の中で、教師の関わりが児童に与える影響はたいへん大きなものです。ほめるべき時にはしっかりほめ、児童の自己肯定感を高めていくはたらきかけをしていくことが大切です。自己肯定感を高めていくことは、児童が中学校、高校、大学と規模の大きな学校や社会に出ても、ひるまずに、自信をもって学んでいくための原動力になります。

## ⑥児童と一緒に活動すること

複式学級のように少人数の学級においては、教師が身をもって示したり、児童とともに活動したりすることが、児童の活動への意欲を高めたり活動の幅を広げたりすることにつながります。特に、低学年や学年初めは、児童とともに活動することが大切です。

## ⑦教師間の協議・情報交換をすること

①～⑥は、複式学級指導にあたる教師の一般的な心構えとして示しましたが、複式学級だけでなく、へき地・小規模の単式学級や、大規模校の単式学級にもあてはまります。上記の教師の心構えを参考に、学校や学級の実情に応じて、教師間でよく語り合うことが大切です。楽しく、有意義な「職員会議」「研修会」になるようにし、授業の進め方、児童への対応等を話し合ひましょう。また参考図書や「手引き」、実践事例等を読んだり、県内外の研究会等に出かけたりし、複式学級の指導についての研修、研究を深めましょう。

## (2) ノートのとり方の指導の工夫

ノートをとることには様々な意味やねらいがありますが、複式学級の間接指導においては、教師が児童一人一人の考えを捉えるための特に重要な材料となります。ノートに書かれた児童の取組の様子や考え方のよさをもとに、次の授業を展開したり、取組のよさをほめ、価値付け、学びの質を高めたりすることが大切です。児童の学習ノートを上手に活用する工夫をしましょう。そこで、ノートには、日付、学習のめあて、自分の考え、友達の考え、学習のめあてをもとにした振り返り等を書くよう指導します。日付を書く位置や、学習のめあての書き方、色鉛筆の使い方、振り返りの書き方等を、学校全体で共通のものにし、学び方の積み重ねにより記録の仕方や考えの書き方が深まるようにします。

また、間違っただけの解答や、不十分である考えもそのまま残し、大切にしよう伝えます。このことにより、教師は間接指導の際の児童のつまづきがわかり、その後の指導に生かすことができます。児童にとっても自分の学習の課題を振り返ることができる好機となります。低学年のうちから、「間違い」を大切にすることを伝えていきます。

これらは、個別の指導をより有効に進めるための方法の一つで、学年間で共通性を持たせた各学校独自のノート使用の工夫が望まれます。



### (3) 黒板やホワイトボードの使い方の工夫

#### ① 児童が学習に見通しをもてる学習のめあてを書くこと

学習を進行する際、黒板に書かれた内容によって、児童は学習の見通しをもつことができま  
す。本時の学習に見通しをもつことは、主体的な学びとなる契機となります。学習が始まる前  
に、教師またはガイド役の児童が、黒板に本時のめあてを書いておきます。

#### ② 児童も黒板を利用し、板書をうまく書けるよう指導すること

間接指導の間の児童の発表の様子や  
話合いの深まりをとらえるために、児童に  
よる板書はとても重要な材料となります。  
板書から読み取った児童の捉えをもとに、  
教師はさらに学びが深まるよう直接指導  
において声かけすることができるように  
なります。そのためにも、児童がうまく板書で  
きるよう指導することが大切です。



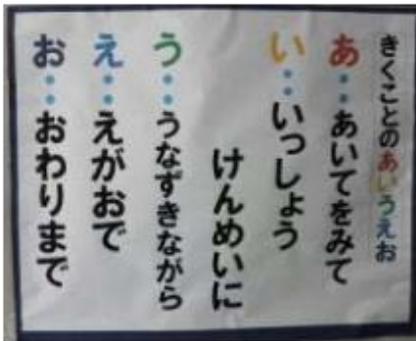
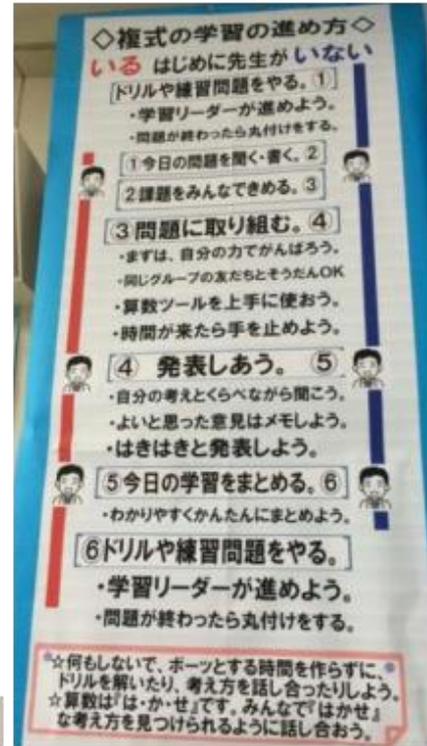
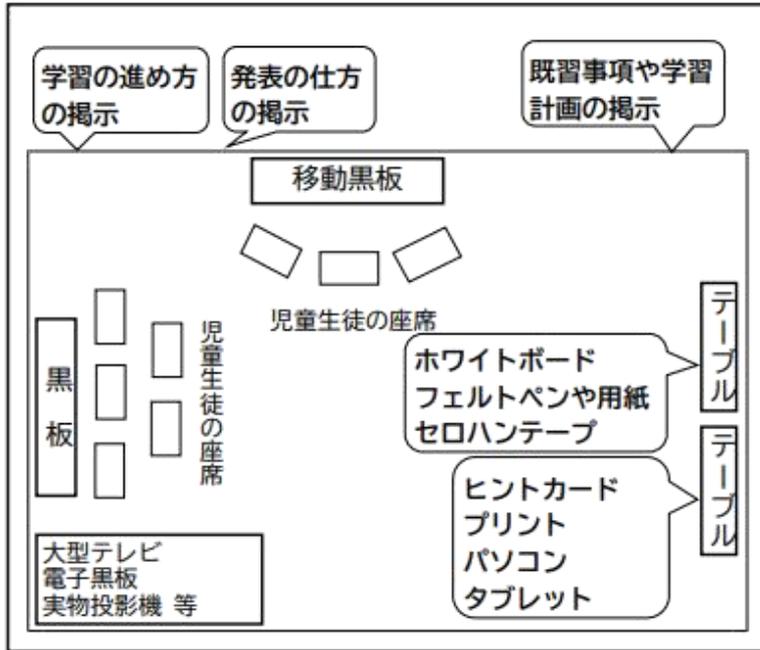
チョークを使って書くことの困難さから時間がかかるといったマイナス面もありますが、多くの  
児童が黒板に書く活動を好み、積極的に取り組みます。教師は、チョークの握り方や書く文字  
の大きさ等を年度当初に確認しておきます。また、考えを出し合う際は、どの児童の考えかわ  
かるように名前を明記することも大切です。その他にも、慣れてくれば発言した内容を全て書  
くのではなく、要約して書いたり、付け加えは黄、反対意見は赤で囲むといったように、色チョ  
ークをうまく使ってまとめたりするように工夫していきます。経験を重ねれば、ガイドが進行と板  
書を同時に行えますが、初めは板書担当を  
決めて行う方法もあります。また、黒板に比  
べてホワイトボードは鉛筆と同じ感覚で書く  
ことができるので、比較的速く書くことがで  
きます。小型のホワイトボードを各自が持つ  
て、うまく活用している事例もあります。

このように、黒板でもホワイトボードでも、  
板書に慣れて学習に有効に活用されるよ  
う工夫することが大切です。



## 教室環境

自主的に学習を進めることができるような教室環境として、以下のような例が考えられる。



### (4) 多様な考えを引き出す工夫

#### ① 教師が児童役となる

小規模の複式学級においては、学年別指導において1人で学習しなければならない場合があります。そういった場合には、1人の考えでは限界があるので、教師が児童役となって考えを出すことも多様な考え方にふれさせる方法の一つです。しかし、当然、児童が考える時間を十分確保したうえでの教師の発言でなければなりません。また、内容によっては学級外の児童、校内、家庭、地域の方々の考えにふれる機会を設けるなどして、様々な意見や考えを求

める姿勢を育てることも大切です。

## ②ノートに考えを書く時間を確保する

児童からできるだけ多くの見方や考え方を引き出せるよう、書いて考える時間を確保します。ノートに書かれた考えをもとに声かけし、さらに考えを引き出せるようにします。

## ③引き出したい考えを事前に教師が予想する

児童に多様な考えを出させたいと願うならば、何をもって多様な考えとするのか、教師は事前に予想しておく必要があります。児童にふれさせたい考えを教師が材料としてもっていなければ、児童に提案することはできません。また、考えを広げたり深めたりできる教材や発問の工夫が必要です。

## (5) 効果的に学年別に学習する座席配置

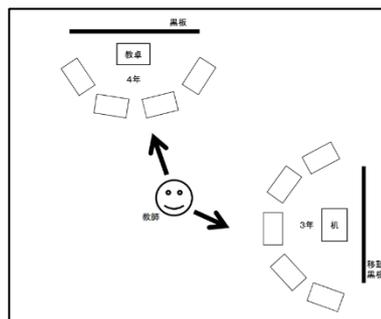
下図は、同じ教室で2つの学年が別々に学習し、1人の教員がその指導にあたる場合の教室の座席配置の例です。

(図 学年別指導の際の座席配置例)

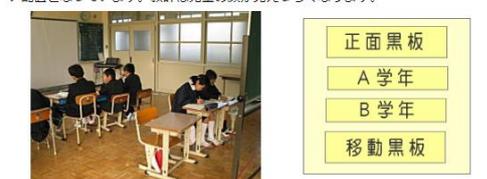
**A学年前向き・B学年横向き**  
A学年が前を向いて正面の黒板を使い、B学年が横を向いて、ホワイトボードや移動黒板を使って学習する形態です。両学年の児童の顔が見やすく、教師の動きもスムーズにいきます。  
一般的に複式授業では、この配置で学習することが多いと思われます。  
学年の机を向かい合わせて、グループ学習をすることもあります。



正面黒板  
移動黒板  
A 学年  
B 学年



**A学年前向き・B学年後ろ向き**  
(又はA学年横向き・B学年横向きというように互いに背を向けて学習する形態です。)  
それぞれの学年の視界がさげられるので、隣で学習していることが気にならない配置となっています。教師は児童の顔が見えづらくなります。



正面黒板  
A 学年  
B 学年  
移動黒板

**A・B学年共に前向き**  
生活科や総合、道徳、学級活動など異学年同単元の指導に適した机の配置です。両学年一斉指導になります。



正面黒板  
A 学年  
B 学年

一方の学年は移動黒板を用いて学習します。前面と側面を利用することによって、互いの学習が視界に入りづらく集中しやすい、ガイド役の声の干渉がさけられるというよさがあります。教師の立ち位置は、両学年の間とし、ガイド学習をする際は、児童の実態にもよりますが後ろから見守り、必要に応じて支援できるようにします。また、それぞれに教卓やそれに代わる机を用意しておくと、教材の提示やガイド用の席として使用できます。

このような配置にした場合、前面や側面の掲示物はできるだけ少なくし、学習に集中できるよ

うにします。ついでがあれば、2つの学年の間に置くと効果的です。また、発表の仕方や学習の約束等を前面、側面の児童から見えやすいところに掲示すると、間接指導の場面で生かされます。座席配置については学校全体でよく協議して、児童の学びを低・中・高でつなげる等、教室環境を工夫することが大切です。

また、教科や学習内容・活動の違いに応じて、ふさわしい座席配置を工夫する等柔軟に変更する姿勢も大切でしょう。座席配置の変更を児童が自ら提案していくことも望ましいといえるでしょう。

## 10. 複式学級を有する学校の学校経営・学級経営

### (1) 初めて複式学級を有する小学校に勤務する教職員のみなさんへ

複式学級を有する小学校に初めて勤務する教職員の皆さんの中には、単式学級が主流で標準的であると考え、複式学級は傍流で例外的であるといった意識をもっている人はいませんか。また、単式学級での教育経験をそのまま複式学級に持ち込もうとしたり、単式学級と同じように展開できないことで複式学級では十分な教育ができないという思い込みに縛られたりしていることはありませんか。もしそうだとしたら、その学校で学ぶ児童に十分な教育を行うことはできません。まずは教師が、複式教育に対するマイナスイメージを払しょくする必要があります。

複式学級には単式学級や大規模校とは異なるよさや課題があり、それを教師がしっかり認識して指導にあたれば、複式学級は、単式学級での学びを上回る教育効果が期待できます。逆に、教師が、複式学級であることを悲観したり、単式学級に及ばないと思い込んだりして指導にあたれば、教育効果を十分にあげることができないでしょう。「単式学級だったら・・・。」と教師が複式学級であるという現実を日々後ろ向きに捉えて児童の指導にあたるとすれば、その指導を受ける児童は自信をもって学ぶことができないでしょうし、自分たちの学校や地域に誇りをもつことさえ到底できなくなるでしょう。複式学級指導に熱心に取り組んでいる先進校を訪問し、授業を参観すると、教師の指示による受け身の学習ではなく児童自身が進んで自分たちで授業を進めている姿に驚かされます。そして、授業協議の場では、授業者をはじめ教職員の皆さんがいかに児童の主体的な学びを実現するために努力しているか、また、複式学級指導にやりがいをもって教育にあたっているのかが伝わってきます。先生方からは「複式学級指導は本当におもしろいですよ。確かに大変ですけどね。」といった声が

聞かれます。さらに、保護者の方からは「授業公開日に、うちの子らが自分たちで授業を進めているのを見ると我が子ながらすごいなあと思うんですよ。」といった声が聞かれます。教職員がそのよさを実感し、課題を認識して指導にあたれば、複式学級ではとても質の高い教育を実現できるのです。

「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」により、日本には、単式学級と複式学級があります。私たち教師は、担当する学級が単式学級であろうと複式学級であろうと、多人数の学級であろうと数名の小規模の学級であろうと、教育のプロとして、目の前の児童に対し、今置かれている状況において最善の教育を提供する責務があります。単式学級を担任している教員は、日々、1時間の授業の中で学級全員が目標を達成できるようにと様々な指導の工夫をしたり、提出物の確認やテストの採点等で方法を工夫したりするでしょう。このように学級には多人数の児童を指導する教師としての専門性があるのと同様に、複式学級には複式学級を指導する教師としての専門性があるのです。複式学級を有する小学校に赴任したならば、日々の研鑽を通じ、複式学級指導の専門性を高めていく必要があります。前述にある複式学級指導の留意点を十分理解するとともに実践に生かして、教育のプロとしての誇りと自覚をもって児童の指導にあたるよう努力しましょう。

## (2) 管理職のリーダーシップのもと学校全体で取り組む

学級編制や規模に関わらず、どのような小学校においても、管理職のリーダーシップのもと学校経営がなされていますが、特に、複式学級を有する小学校において必要で特有な配慮事項について検討してみましょう。

### ①管理職が複式学級指導のよさと課題を理解して教育課程を編成する

まず、何よりも大切なことは、管理職である校長及び教頭が、複式学級のよさに目を向けることが大切です。

### ②年度当初には複式学級指導の有効性と留意点について教職員が共通理解をもつ

校長は、年度初めに複式学級のよさを生かした学校経営について全教職員に説明したり、協議したりする場を設けたりすることが大切です。校長としては、始業式を迎える前に複式学級のよさや課題、複式学級を有する小学校に勤める教職員としての心構え等を理解しあう機会をもつ必要があります。全ての教職員が、目指す児童像を同じくし、同じ方向を向いて指導にあたることは、単式学級、複式学級に関わらず、教育目標を達成する

うえでとても大切です。小規模校としてのよさを生かして、大規模校ではできないほどの教職員間の意思の疎通を密接に図っていきましょう。

### ③移行期には5年先、10年先を見通して教育課程を編成する

近年、少子化による児童減少に伴い、単式学級から複式学級に移行したり、複式学級から欠学年が生じ単式学級に移行したりするといった、単複を繰り返す学級をもつ学校が多く出てくる可能性があります。そこで校長は、今後の児童数をふまえ、学級編制の変化を見通した教育課程編成の準備を始める必要があります。教育課程の編成は、その年だけとか、1～2年先といった短いスパンではなく、5年先、10年先を見通すことが求められます。小学校に入学してから卒業するまでは6年間あるわけですから、入学した1年生が小学校6年間でどのような教育課程を経て卒業するのか、説明できる必要があります。複式学級になる場合は、どのような指導類型をとっていくかということについても校長は教職員とともに決定しなければなりません。教務主任や複式学級の担任一人に任せられるようなことではなく、校長がリーダーシップをもってそれぞれの指導類型の長所短所を十分に理解し、数年先を見越して決定するようにします。

特に、児童数の増減が続く移行期にある学校においては教育課程の編成や指導類型の検討を迫られることとなりますが、年度が変わるごとに教育課程の編成方針が変わると、児童や保護者は戸惑うこととなりますし、一貫性のない教育課程となります。児童の学びの連続性を考慮した教育課程の編成を心掛ける必要があります。

## (3) 単式学級から複式学級への移行期の指導や学校経営で大切にしたいこと

### (ア) 複式学級になる数年前から見通しをもって、児童育成の方針の転換を図る

複式学級になり学年別指導を行う場合には間接指導があり、児童が自分たちだけで授業を進める時間が生じます。複式学級に移行する前に単式学級の時から、教師の指示だけではなく例えばガイドにより児童が自分たちで進める授業スタイルで学習する経験を積むことにより、複式学級になった際のとまどいが軽減できると考えられますし、教師にとっても、間接指導の際の支援等を研究する機会になります。また、複式学級指導で一番難しいのが、つい手や口を出してしまい児童の主体的に取り組もうとする意欲をそいでしまうことです。もちろん必要などときには教師が支援しなければなりません。児童にまかせ待つという視点からの授業改善をこの期間に意識し、実践していくことが大切です。

す。児童の主体的な学習を検討・工夫するよい機会としたいものです。

このような対応は、複式学級に移行する学級だけでなく、1学級でも複式学級になる予定ならば、その学校の他の単式学級でも同じように児童が主体的に学習を進める授業スタイルに変えていくと効果的です。教職員全員で間接指導の在り方について研究を深めることにもなります。

児童数は安定的に複式学級になる学校もあれば、いったん複式学級になっても児童数が安定せず、欠学年が生じたり単式学級へと移行したりする学校もあり、それぞれの学校によって状況は様々です。そこで校長は、今後の児童数をふまえ、学級編制の変化を見通した教育課程編成の準備を始める必要があります。複式学級になる場合は、どのような指導類型をとっていくかということについても校長は教職員とともに決定しなければなりません。

#### (イ) 初めて複式学級を担当する教員、初めて複式学級になった学級を担当する教員への支援

初めて複式学級の担任となった場合、複式学級特有の学年別指導に最もとまどいを抱くでしょう。また、教員だけでなく、児童も新しい学び方にとまどうことと思います。

そのような場合の初期段階において、教頭や専科教員等による効果的な支援をする方法があります。様々な方法があると考えられますが、効果的な方法の1つとして、学年別指導をする授業を $T_2$ が支援する方法があります。慣れないうちは、1人で2学年を指導すると、一方の学年が何をしてもよいかわからない状況になったり、個への支援が十分でない状況になったりすることが生じます。そこで $T_2$ の教員は、両学年を俯瞰しながら見守り、例えば困っているガイド役の児童を支援する担当をします。そして、少しずつ $T_2$ の出番を減らし、最後には $T_1$ の教員1人で学年別指導ができるように移行していきます。支援の際は、あくまで授業を進めるのは $T_1$ であることを忘れないようにします。

初めて複式学級を担当することになった教員の中には、自分の学級以外は単式学級というケースもあります。そういった先生方から多く聞かれるのは、自分だけが複式学級で、なかなか他の教員と課題を共有できず孤独を感じるといった感想です。特定の教員だけでなく、校内の全教職員が $T_2$ として授業にかかわることで、皆で授業者と課題を共有しながら学校全体で支援していくことが大切です。

また、初めて複式学級を担任する教員の学級と同様に、たとえ複式学級指導の経験がある担任が授業する場合においても、単式学級から初めて複式学級になった学級の場合は、児童が学習スタイルにとまどうことが予想されます。そういった児童の支援のために、年度当初は慣れるまでT<sub>2</sub>が支援をすると効果的です。

#### (4) 保護者や地域の方々へ複式学級指導について情報を発信する

教職員が同じ方向を向いて指導にあたることと同様に、保護者や地域の方々も複式学級指導のよさを共有することが大切です。保護者や地域の方々が、学校の複式学級のよさに目を向けた取組を知れば、家庭や地域で児童の主体的な学びの姿が認められ、相乗効果により児童の学びはさらに伸びていきます。一方、学校の複式学級指導が不十分であれば、保護者の方は学校の教育へ不安感や不信感を抱くことにつながりかねません。

単式学級編制だった学校に初めて複式学級ができる際、その事実を保護者に伝えるタイミングは、当該年度当初、1年前、2年前と様々な時期が考えられますが、初めに伝えることができるのは、対象となる児童が入学した時でしょう。児童が入学する時には、その児童が卒業する時の児童数は推定できる状況にあります。例えば小学校3年生で複式学級になることが推測されたならば、入学時の説明会において、その事実を伝えておくことが望まれます。加えて、複式学級指導のよさと課題について、あるいはそれまでの学校の準備体制について伝えていくことが、保護者の方々の安心へつながります。

地域の方々への発信も大切です。少子化による児童減少は、学校だけでなく地域にとっても大きな課題です。児童数の減少を受け、市町村によっては統廃合が進んでいるところもあります。時には保護者や地域の方々から複式学級指導の是非について問われることもあるかもしれません。その際に、私たちは教育のプロとして、胸を張って、複式学級、単式学級それぞれによさと課題があり、いずれの学級編制であってもそれぞれのよさを生かした最善の教育をしているのだということを、自信をもって説明できなければなりません。

また、もともと複式学級を有する小学校の場合も、学校便りや学級便り等で機を捉えて複式学級指導のよさや学校の取組について発信します。小学校1年生が入学する際は、前述の場合と同様に保護者に対し丁寧に説明する必要があります。

最後に、中学校への発信についてもふれます。学年別指導の様子を中学校の教職員に授業公開し、中学校区で主体的な学びのスタイルを共有し、中学校での学びにつなげていくこ

とが大切です。

以上、保護者や地域の方々、中学校への説明についてふれてきましたが、小学校の教職員誰もが同じスタンスで説明できるようにすることが大切です。

#### (5) 複式教育に係る校内研修・校内研究

これまでも述べてきたように、複式学級指導は複式学級を担任する教員だけでなく、今後1学級でも複式学級になる学年があるならば、学校全体で研修を深める必要があります。複式学級になる数年前から、複式学級指導を核とした校内研修や校内研究を実施することでより研究が深まります。特に、先進校への視察は効果的です。複式学級指導により、主体的に学ぶ児童の姿や複式学級であることを誇りに思い日々指導に取り組む教員の姿にふれることは、自分たちの目指す姿がイメージできることにつながります。1人よりも2人、可能ならば学校の教職員全員で出かけることで、複式学級指導イメージを共有でき、その後の研究の推進につながられます。なお、他都道府県に出かける際は、学級編制や教員の加配等が本県とは異なる場合があることに留意しておく必要があります。

複式学級指導に係る研修や研究は、単式学級のそれ以上に教育課程の編成や学校経営に大きく関わってきます。研究主任だけではなく、管理職こそ積極的に研修や研究に関わっていくことが大切です。

なお、インターネットで複式指導にかかわる資料は指導案も含めたくさん情報収集することができ状況にあります。目の前の子どもたちの実態や地域の実情に応じて、年間計画や単元構成について、検索し、実践していくことも重要です。一度に2学年を教えることは大変なことですが、それ以上に充実した教師人生になることは間違いのないことです。子どもたちのために頑張ることが、教師の仕事、使命であることを自覚し、実践して行ってほしいです。

#### (6) 複式学級を有する学校間の協力

学校内で課題を抱え込まず、複式学級を有する近隣の学校との協力体制をつくることも大切です。教育課程の編成や、授業協議の交流等で情報を共有していくことで、複式学級指導についての研修や研究を深めていくことができます。

国指定のへき地校の場合は、県へき地教育研究会や全国へき地教育研究連盟が開催する授業研修会等に参加する機会があります。理事会等もあって校長同士の意見交換も行われやすい状況にあります。しかし、国指定のへき地校ではない学校は、他の学校との交流の

機会が少なくなりやすいようです。情報不足等により、教育課程の編成や教科書の無償給与事務等で課題が生じている状況もあります。より意識して市教委や他の学校との連携を密にし、情報交換をするとよいでしょう。

先進校では、市郡教育研究会単位で各教科の年間指導計画等を共同で作成していたところもあったようです。年間指導計画だけでなく、同じ教科書で学ぶ学校同士が協力して学習ガイドを作成したり、共同で教材研究をして教材の精度をあげたりすれば、準備に係る負担を減らすことができます。

#### □参考文献

○小学校学習指導要領

○複式学級指導の手引き(令和2年3月) 島根県教育委員会

○全国へき地教育研究連盟編集「学習指導方法の工夫・改善」

○複式学級担任の手引き(平成31年3月) 栃木県教育委員会

○へき地・複式教育ハンドブック(一般編)平成31年3月

(事例編)令和4年3月 青森県教育委員会

○複式教育の基礎・基本(長崎県教育委員会)

○複式学級を有する学校のために

---複式学級指導資料---(宮崎県教育委員会)

○菅島小学校研究紀要(令和3年度鳥羽市教育委員会研究指定)

鳥羽市へき地複式教育振興会研究指定)